



北海道公立大学法人
札幌医科大学
Sapporo Medical University

札幌医科大学学術機関リポジトリ *ikor*

SAPPORO MEDICAL UNIVERSITY INFORMATION AND KNOWLEDGE REPOSITORY

Title	看護学生の看護婦、作業・理学療法士、医師のイメージ（１）-入学後間もない時期-
Author(s)	石塚, 百合子;水戸, 優子;杉山, 厚子;木原, キヨ子;丸山, 知子
Citation	札幌医科大学保健医療学部紀要,第 1 号:15-21
Issue Date	1997 年
DOI	10.15114/bshs.1.15
Doc URL	http://ir.cc.sapmed.ac.jp/dspace/handle/123456789/6595
Type	Journal Article
Additional Information	
File Information	n13449192115.pdf

- ・コンテンツの著作権は、執筆者、出版社等が有します。
- ・利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲内で行ってください。
- ・著作権法に規定されている私的使用や引用等の範囲を越える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。

看護学生の看護婦、作業・理学療法士、医師のイメージ（1） －入学後間もない時期－

石塚 百合子¹，水戸 優子²，杉山 厚子¹，木原 キヨ子¹，丸山 知子¹

札幌医科大学保健医療学部看護学科¹

東京都立医療技術短期大学² （前 札幌医科大学保健医療学部看護学科）

要 旨

看護学生が、新設4年制大学の入学した当初に、自己の選択した看護婦について、あるいは作業・理学療法士や医師についてどのようなイメージを持っているか、調査した。

対象は、札幌医科大学保健医療学部看護学科の学生205名で、入学後まもない4月に実施した。

イメージの調査は、Semantic Differential technique（以下、SD法）を用い、18尺度で7段階評定で直感的に回答させ、今後の追跡研究のため学生番号を記入させた。結果は、以下の通りであった。

- （a）看護学生は、おおむね看護職につくことを望んでいる。
- （b）看護婦に対する全般的イメージは非常に好意的・肯定的である。
- （c）しかし、看護婦に対して自由がないとみている。
- （d）他の医療専門職者よりも看護婦に対して好意的イメージがある。
- （e）医療専門職者に対するイメージは自由がないとみている。

<索引用語> 看護婦イメージ、SD法、直感的印象

緒 言

高齢化の進展、医療の高度化・専門化に伴い看護職者は基礎教育においても科学的思考を基盤とした看護の実践力や保健・医療・福祉全般にわたる広い視野と高い教養が求められている。

また、少子化の進行とともに高学歴志向がさらに高まりつつあるが、中・高校生の時代から偏差値による選別によって、不本意ながら将来の方向性を規定され、望まない職業を選択している者もいると考えられる。

さらに、現代の青年は価値観が多様化し、イデオロギー不在で、生活様式が画一型となっている¹⁾。

そのような現代青年期の看護学生の意識・態度を理解し、看護能力や資質をいかに個々の学生から引き出し教育していくかが我々教育の一部を担当する者に与えられた課題となり得よう。

看護婦・看護職イメージの先行研究は、一部のものは、Semantic Differential technique（以下、SD法）を用いているが直感的に回答するには項目数がかかなり多

かったり、その他のものは、いずれも具体的・実証的知識によるアンケート調査である^{2～4)}。

人の社会的行動は、必ずしも具体的・実証的知識に基づくものではなく対象に対する漠然とした印象に左右されることが多い。学生が将来の職業を決めるに当たって看護職を選択する場合、こうしたイメージによっているものと考えられ、また職務内容に対する態度期待、総体的印象が大学生活のあり方を方向づけると判断される。教育においてはこの点を考慮してみていく必要があると考える。

本研究は、北海道内の看護婦養成校の学校種別では最も高いレベルの新設4年制大学に入学した看護学生が、入学当初にどのような形で自己の選択した職業を受けとめているか、そのことが今後専門教育を受けていく過程でどのように変化するのか、さらには他の医療専門職と比較して違いがあるのか、などについて継続して調査することが今後の研究を含めた目的である。なお、15年前に当時最も高い教育レベルであった新設3年制短期大学の看護学生の調査結果⁵⁾とも比較した。

方 法

a. 対 象

対象は、札幌医科大学保健医療学部看護学科の学生で本調査の協力に同意した1期生から4期生の205名（女子200名、男子5名）である。

b. 調査用紙の構成と実施方法

イメージの調査は、オズグッドによって開発されたS D法を用い、7段階評定で行った。

意味尺度の構成は、白佐⁶⁾の行った調査を参考に新たに3尺度を加え、表1に示すように総計18の形容詞対を選んで行い、尺度の配列や形容詞対の左右の方向の決定は無作為配列法とした。

表1 尺度の構成と配列

1.	おもしろい	つまらない
2.	活気のある	活気のない
3.	安定した	不安定な
4.	らかな	労の多い
5.	きれいな	好きな
6.	年寄りじみた	若々しい
7.	親しみやすい	親しみにくい
8.	スマートな	ヤボな
9.	価値のある	価値のない
10.	感情的な	理性的な
11.	暗い	明るい
12.	重要な	重要でない
13.	責任感の強い	無責任な
14.	なりたいたい	なりたくない
15.	なる望みのある	なる望みのない
16.	特色のない	特色のある
17.	温かい	冷たい
18.	きゅうくつな	自由な

対象者には、簡単なインストラクションを与えた後、それぞれの描いているイメージと合致する評定段階を直感的にマル印にて囲んでもらった。

イメージ対象職種は、看護婦、作業療法士（Occupational Therapist, 以下、O T）、理学療法士（Physical Therapist, 以下、P T）、医師の順に示し、それぞれ前の職種の調査用紙を回収してから新たに示し記入させた。また、継続して調査することを考慮して、学生番号を記入することを依頼した。調査期間は、1993年から1996年であり、いずれも入学間もない4月に実施した。

c. 結果の処理

各尺度のそれぞれの段階に1～7点を与え平均値を算出し、各群のイメージ内容を比較検討した。好意度の高いと思われる方の得点が大きくなるようにしたので調査用紙の配列・方向は異なるものとなっている。データ処理はパーソナルコンピュータにより統計学パッケージspssを用い、平均値の差の検定はt検定、因子分析はバリマックス回転、クラスター分析は最長距離法で行った。

結果および考察

a. 看護学生の志望職業

一般に看護学科に入学してきた学生は、看護職につくことを望んでいるものと考えられ、第一志望を看護婦（士）、保健婦（士）、助産婦などの看護職を志望することが予想される。以上のような想定のもとに看護学生の志望職業について回答を得た結果を表2に示す。

表2 本学の看護学生の志望職業

(数値は人数、カッコ内はパーセンテージ)

志望職業	全体	1期生	2期生	3期生	4期生
看護婦(士)	103 (50.2)	13 (25.5)	34 (65.4)	28 (53.8)	28 (56.0)
保健婦	45 (22.0)	11 (21.6)	9 (17.3)	16 (30.8)	9 (18.0)
助産婦	10 (4.9)	1 (2.0)	1 (1.9)	3 (5.8)	5 (10.0)
看護の教師・研究者	14 (6.8)	5 (9.8)	5 (9.6)	4 (7.7)	0 (0.0)
養護教諭	1 (0.5)	0 (0.0)	0 (0.0)	1 (1.9)	0 (0.0)
薬剤師	7 (3.4)	7 (13.7)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
医師	7 (3.4)	4 (7.8)	2 (3.8)	0 (0.0)	1 (2.0)
臨床検査技師	1 (0.5)	1 (2.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
研究者(看護領域以外)	2 (1.0)	2 (3.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
保母・幼稚園の先生	1 (0.5)	1 (2.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
学校の先生	2 (1.0)	2 (3.9)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
医療従事者	1 (0.5)	1 (2.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	0 (0.0)
その他	11 (5.4)	3 (5.9)	0 (0.0)	1 (1.9)	7 (14.0)
合 計	205 (100)	51 (100)	52 (100)	52 (100)	50 (100)

全対象205名中、第一志望を看護職とする者は172名(83.9%)で、看護職以外とする者は33名(16.1%)であった。15年前の調査では、看護職を希望する者が87%であったことからすると⁵⁾、若干低くなっていると言える。但し、入学期別にみた場合には、看護職を志望している者の割合は、2期生49名(94.2%)、3期生51名(98.0%)、4期生42名(84%)とむしろ15年前の結果よりも高くなっている。1期生が21名(58.8%)と極端に低いことが、全体を低くしているのであり、特徴的なクラスといえる。その低い理由は、入学選択方法の違いが推測されるが、明確には分からない。

以上から、本研究対象者である4年制大学に入学してきた看護学生は、おおむね第一志望として看護職を望んでいるものと考えてよいであろう。

b. 看護学生の看護婦に対するイメージ

一般的に職業に対するイメージをもつ時、本人が志向する職業との関連を軽視することはできないと考えられる。即ち、ある特定の職種に対しては当然その志望程度の強弱に応じた反応を示すと予測され、なりたいたいと熱望する職種であれば、そうではない職種に比べて好意的かつ肯定的イメージを抱くものと思われる。また、なんらかの類似点をもつ職種に対しては多分に好意的イメージを寄せるものと考えられる。このような考え方が妥当だとすれば、看護学科に入学してきた学生は、看護婦という職種に対して相当好意的イメージを持つものと予測される。

以上のような想定のもとにSD法のデータ処理に従って看護学生の看護婦に対するイメージを算出したのが表3に示すとおりである。

表3 看護学生の看護婦に対するイメージ

(数字は平均値、カッコ内は標準偏差)

尺 度	看護学生 全体 (n=205)	志望比較別		
		第1志望 看護婦 (n=172)	第1志望 看護婦以外 (n=33)	平均値の 差の検定
責任感の強い	6.42(1.05)	6.55(0.70)	5.76(1.97)	・
重要な	6.38(1.07)	6.49(0.76)	5.79(1.93)	・
価値のある	6.36(1.01)	6.44(0.77)	5.94(1.75)	有意差なし
労の多い	6.21(1.11)	6.26(0.89)	5.97(1.88)	有意差なし
特色のある	5.78(1.07)	5.79(1.00)	5.73(1.38)	有意差なし
理性的な	4.31(1.44)	4.31(1.43)	4.27(1.55)	有意差なし
自由な	2.99(0.98)	3.02(0.99)	2.79(0.93)	有意差なし
若々しい	4.75(1.15)	4.83(1.12)	4.30(1.24)	・
スマートな	4.53(1.12)	4.59(1.11)	4.21(1.17)	有意差なし
明るい	4.94(1.15)	5.02(1.11)	4.49(1.25)	・
活気のある	5.93(1.06)	6.04(0.91)	5.36(1.52)	・
温かい	5.66(1.18)	5.72(1.10)	5.39(1.50)	有意差なし
安定した	4.80(1.46)	4.83(1.37)	4.64(1.87)	有意差なし
希望のある	5.47(1.17)	5.62(0.98)	4.70(1.72)	・
おもしろい	5.43(1.13)	5.52(1.06)	5.00(1.39)	・
親しみやすい	5.17(1.30)	5.24(1.22)	4.79(1.66)	有意差なし
好きな	5.10(1.17)	5.23(1.03)	4.39(1.54)	・
なりたいたい	5.57(1.32)	5.76(1.11)	4.58(1.80)	・

*P<0.05, **P<0.01, ***P<0.001

これをプロフィールの形で示したのが図1である。

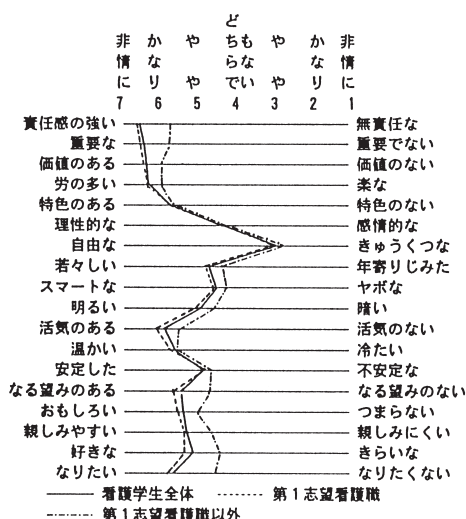


図1 看護学生の看護婦に対するイメージ

①看護学生全体的場合

図1の‘どちらでもない’を基準に全体のプロフィールをみると、‘自由な－きゆうくつな’以外の17尺度は、すべて左側に偏っている。前項で述べたようにすべての尺度の段階は好意度が高いほど左側に偏るような配列にしてあるので、好意的・肯定的イメージを強く持っていることが確認された。

好意度の特徴を述べるとすればプロフィールの位置からほとんどの尺度で言い表されなければならないのであるが、あえて相対的な特徴をとらえるために評定点が5.5以上を好意的特徴、4.5以下を非好意的特徴としてみることにする。その場合、看護学生は看護婦に対して‘責任感が強く、重要で、価値があり、労は多いが、活気があり、特色のある、温かい、だからなりたいたい’とみていえる。しかし、‘自由な、理性的な’職種とはみていない。特に‘自由がない’とみている点が特徴的である。これは、15年前の調査結果と同じ結果である⁵⁾。対象は入学間もなくむしろ社会一般的なイメージを持っていると言える。一般の人々にも自由がないように映っているのかもしれない。今後看護を学ぶなかでどのように変化していくか、関心があるところである。なお、‘理性的でない’とみている点は、15年前にはみられなかった。これはどのような意味があるのだろうか。4年制大学に入学してくる看護学生は、高校時代の偏差値による選別でより高い知識・知能階層に属し、理性的なものを重視する傾向があると推測される。その点では現状の臨床看護はそうみえていないのかもしれない。

②志望別にみた場合

次に全体を第一志望看護職、第一志望看護職以外に分けて検討を行った。全対象者205名中、看護職を志望する者は172名(83.9%)で、看護職以外を志望する者は33名(16.1%)であった。

前述のように、看護職を志望する者は、看護職以外とした者よりも、より好意的・肯定的イメージを示すものと考えられる。表3の志望別および図1で示すように、両者の比較では平均値の差の検定結果、9尺度で有意差が認められた。有意差の認められた尺度から看護職志望者は、看護職志望以外の者よりも看護婦に対して、‘責任感が強く、重要で、若々しく、明るく、活気があり、おもしろい、なる望みもあり、好きだから、なりたいたい’とみる点で好意的である。

逆にいえば、看護職以外の志望者は、看護婦は、‘重要でなく、責任感もなく、明るさや活気がない、なる望みもなく、好きでもない’ので、是非なりたいたともあまり思わない’という見方が強い。これは看護職以外の志望者の中に医師・薬剤師、それらの領域の研究者を志望している者がかなりの割合を占めており、看護婦を医師などと比較して専門職として低く判断していることから考えられる。

こうした考えが今後看護教育を受ける中でどのように変化していくか追跡的研究の中で明らかにしていきたいと考えている。

③入学期別に見た場合

入学期別による差異、すなわち1期生から4期生の間に看護に対するイメージに差があるかどうかを検討してみる。入学期別比較のプロフィールの形で示したのが図2である。各期生のプロフィールはごく接近した曲線を

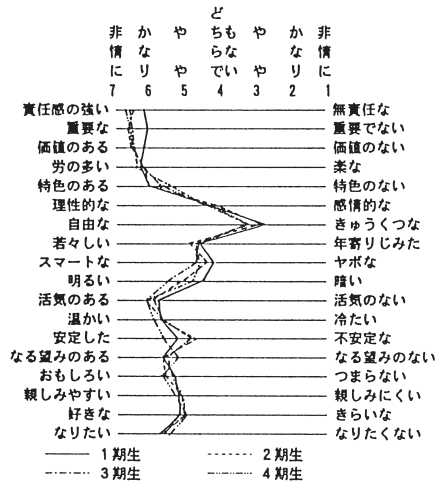


図2 入学期別による看護学生の看護婦に対するイメージ

描いている。すなわち、どの群とも看護婦にかなり好意的・肯定的なイメージを持っているが、自由のない、きゅうくつな非好意的なイメージを持っていて、全体的にはほとんどイメージ差がないといえる。さらに詳細にみると、18尺度中6尺度でごくわずかであるが2期生、3期生、4期生の方が、1期生よりも左寄りの得点プロフィールになっており、看護婦に対して好意的である傾向が認められる。しかし、有意差の検定結果上では、尺度上わずかに差が認められるのみであり入学期別の差異を断定できるものではなかった。

④看護婦に対するイメージ構造の因子分析による検討

看護学生が入学間もない時期において抽出された因子数は表4に示した5個であった。

第一因子には、‘重要な (0.897)’ ‘価値のある (0.893)’ ‘責任感の強い (0.897)’ ‘労の多い (0.852)’ ‘活気のある (0.536)’ が強く関連していた。すなわち看護婦の社会的価値を示す尺度群といえる。

第二因子には、‘なりたない (0.887)’ ‘好きな (0.861)’ ‘なる望みのある (0.855)’ ‘おもしろい (0.608)’ が強く関連していた。言い換えるならば看護婦になりたい個人的・好意的意識に関連した尺度群であるといえる。

第三因子には ‘明るい (0.715)’ ‘若々しい (0.713)’ ‘スマートな (0.663)’ が強く関連していた。これは看護婦に対する表面的な一般的・好意的印象と関連した尺度群であるといえる。

表4 看護学生の看護婦に対するイメージ構造

イメージ項目	第一因子	第二因子	第三因子	第四因子	第五因子	共線
重要な	0.897	0.151	0.017	-0.028	-0.047	0.832
価値のある	0.893	0.139	0.150	-0.003	-0.034	0.842
責任感の強い	0.858	0.252	0.093	-0.070	0.071	0.820
労の多い	0.852	0.001	-0.141	0.006	-0.173	0.778
活気のある	0.536	0.451	0.344	0.000	0.041	0.612
なりたない	0.162	0.887	0.073	-0.078	0.068	0.830
好きな	0.040	0.861	0.123	-0.091	0.095	0.776
なる望みのある	0.153	0.855	0.035	-0.004	-0.030	0.757
おもしろい	0.258	0.608	0.299	0.139	0.039	0.548
明るい	0.240	0.262	0.715	-0.316	0.145	0.703
若々しい	0.003	0.187	0.713	-0.025	-0.152	0.568
スマートな	0.094	-0.030	0.663	0.296	0.154	0.561
理性的な	0.009	0.033	0.072	0.689	0.050	0.485
温かい	0.476	0.325	0.295	-0.492	0.102	0.674
親しみやすい	0.296	0.423	0.282	-0.434	0.101	0.546
自由な	-0.156	0.229	0.029	0.008	0.794	0.709
特色ある	0.255	0.217	0.172	0.287	-0.495	0.470
安定した	0.261	0.046	0.201	0.190	0.451	0.351
因子数と2乗の 因子特異性(%)	5.792	2.464	1.370	1.193	1.042	
累積特異性(%)	32.2	45.9	53.5	60.1	65.9	

第四因子には、‘理性的な (0.689)’ ‘温かい (-0.492)’ ‘親しみやすい (-0.434)’ が関連し、これらは看護婦の持つ感覚的な態度に関連した尺度群であると言える。

第五因子には、‘自由な (0.794)’ ‘特色のある (-0.495)’ ‘安定した (0.451)’ が関連し、これらは、第一因子と同様社会的な価値ではあるが、職業としての興味や安定性に関連した尺度群であると言える。

今後の各時点における因子得点の相互関連性を追跡して明らかにしていきたい。

⑤クラスター分析による看護婦のイメージ

次にどのような特徴をもった集団があるのかについて、最長距離法によるクラスター分析を行った。クラスター分析によって7つのクラスターが得られた。図3-1、3-2および図4は各々のパターンを図に表したものである。平均型パターンに近いものと、やや特徴のあるパターンを示すものがあつた。ここで、クラスターA、B、C、D、Eを平均型、クラスターF、Gを特徴型と呼ぶことにする。



図3-1 クラスター別による平均型の看護学生の看護婦イメージ



図3-2 クラスタ別による平均型の看護学生の看護婦イメージ

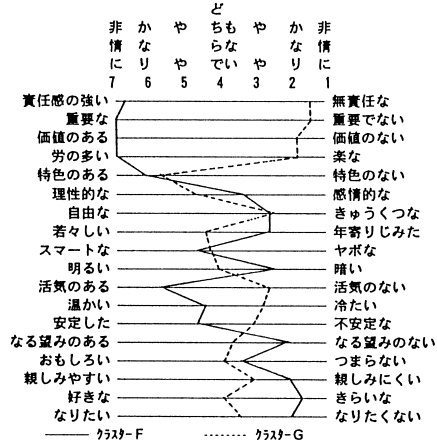


図4 クラスタ別による特徴型の看護学生の看護婦イメージ

入学間もない時期の平均型の学生に共通していることは、看護婦に対して責任感が強く重要で、価値があり、労は多いが、活気があり、特色のある、温かい、なる望みもあり、だからなりたいた。おもしろく、親しみやすく、好きである。しかし自由がない、とみている点である。入学間もない時期であり、看護婦については、漠然として捉えているものと考えられる。

クラスターAは、学生107名で最も多い。看護婦はやや自由がないという感じが強調された型と言える。

クラスターBは、学生2名で、看護婦は、若々しくなく、感情的にみているにもかかわらず、社会的価値と労は多いが特色もあり、なりたいたという感じが非常に強調された型といえる。

クラスターCは、学生38名で平均型のクラスターAに比べると看護婦に対して労が多いとは強く感じていないで、活気があり温かく、なりたいた願望の強い型といえる。

クラスターDは、学生13名で看護婦に対して、自由がないとはそれ程感じておらず、社会的価値、責任感、労の多さもそれ程強くない型といえる。

クラスターEは、学生37名で、クラスターDに比べて、

さらに看護婦に対してなりたいたという感じが弱い型といえる。

特徴型のクラスターFは、学生3名で看護婦に対して、社会的価値と労が多いという感じが非常に強く、自由がなく、若々しくなく、暗く、なる望みもあまりなく、だから嫌いでなりたくない、そしてそれ程理性的でないといっている。

クラスターGは、学生5名で、看護婦に対して特色はかなりあるかもしれないが、社会的責任感、重要性、価値はかなり低いとみている。しかも、楽な仕事で温かさ・安定さ・親しみもあまり感じられず、好きとも嫌いとも分からず、だから将来なる望みやなりたいたともまだ分からないとみている型といえよう。

こうした平均型、特徴型のパターンが、今後看護教育を受ける中でどのように変化していくのか追跡的研究の中で明らかにしていきたいと考えている。

c. 看護学生のお職種に対するイメージ

次に、看護学生が「他の医療専門職者」に対してどのようなイメージをもっているかを調査した。本研究では比較のために選んだ職種は、「OT・PT」と「医師」である。OT・PTはチーム医療の重要なメンバーとして、最近になって一般の人々に知られるようになった職種といえる。看護婦の立場からみたとすれば、リハビリテーションの役割を担う仲間として好意的で、また看護婦と近い立場としてみているのではないかと考える。さらに本研究の対象者は、同学部内にOT・PTの学科を持つことからより好意的に捉えていると推測される。他方、医師は、診療の主体者であり、一般的には社会的価値の高い職種と捉えられていると考えられる。ただし、看護者の立場からすると看護婦に診療の指示を出す者であり、どちらかというと主従関係の中で、主の立場として否定的に捉える面もあるかと考えられる。

これら他職種のイメージについての結果を、表5、図5に示す。

表5 看護学生の看護婦、作業・理学療法士、医師に対するイメージ

(数字は平均値、カッコ内は標準偏差) n=205

尺 度	看護婦	作業・理学療法士	医 師
責任感の強い	6.42(1.05)	5.82(1.08)	6.43(1.25)
重要な	6.38(1.07)	6.03(1.07)	6.50(1.14)
価値のある	6.36(1.01)	6.01(1.06)	6.35(1.14)
労の多い	6.21(1.11)	5.28(1.28)	5.95(1.33)
特色のある	5.78(1.07)	5.23(1.21)	5.93(1.26)
理性的な	4.31(1.44)	4.50(1.47)	5.24(1.36)
自由な	2.99(0.98)	3.88(0.92)	3.35(1.34)
若々しい	4.75(1.15)	4.12(1.06)	3.75(1.09)
スマートな	4.53(1.12)	4.33(0.95)	4.75(1.31)
明るい	4.94(1.15)	4.30(0.98)	4.06(1.01)
活気のある	5.93(1.06)	4.92(1.20)	5.28(1.25)
温かい	5.66(1.18)	5.09(1.20)	4.16(1.28)
安定した	4.80(1.46)	4.91(0.99)	5.50(1.47)
なる望みのある	5.47(1.17)	3.22(1.49)	2.63(1.75)
おもしろい	5.43(1.13)	5.02(1.09)	5.36(1.21)
親しみやすい	5.17(1.30)	4.38(1.23)	3.81(1.23)
好きな	5.10(1.17)	4.46(0.90)	4.73(1.20)
なりたいた	5.57(1.32)	3.96(1.15)	4.26(1.56)

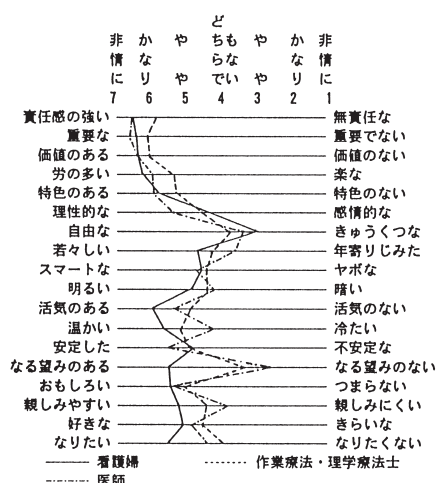


図5 看護学生の看護婦、作業・理学療法士、医師に対するイメージ

全体的には、多くの尺度の評定点が4以上であることから、看護学生は自分が志望する看護婦と比べると低いものの、OT・PT、医師ともに好意的イメージをもっているといえる。しかし、有意差の認められた尺度を比較すると、OT・PTに対してよりも医師に対して、より好意的・肯定的であった。入学間もない看護学生には、まだ一般的な医師と看護婦のイメージが強く、それに対してOT・PTという職種を十分に理解していないことによりこのような結果がでたのではないかと考えられる。今後、看護を学ぶなかで、さらにはOT・PTの学生と同学部で学ぶことによるイメージの変化を追跡していくことが必要と考える。

項目ごとの細部の読みとりは省略して、特徴的な点のみを挙げると、看護学生は医療従事者に対して高い社会的価値を与えていることである。また、医療専門職は自由の少ない職種であり、その中でも明らかに看護婦は、‘きゅうくつな’職種であるという認識に立っていることである。先に述べたように自由の少ない、理性的な面も少ない看護婦であっても、高い社会的価値を認めるがゆえに、あえて看護学科に籍をおき、看護職につこうとする気概がうかがいとれる。

結 語

以上、入学後間もない時点で、札幌医科大学保健医療学部看護学科の1期生から4期生の学生を対象に看護

婦、OT・PT、医師のイメージを調査し、その結果について考察を試みた。この調査によって、

(a) 看護学科の学生は、おおむね看護職につくことを望んでいる。

(b) 看護学生の看護婦に対する全般的イメージは、非常に好意的、肯定的であること、すなわち評定点が5.5以上の尺度で言い表せば‘責任感が強く、重要で、価値があり、労は多いが活気があり、特色があり温かい、だからなりたい’とみている。

(c) 但し、看護学生は、看護婦に対して、‘自由がない’とみている。

(d) 看護学生は、他の医療職よりも看護婦に対して、好意的イメージがある。

(e) 看護学生は、医療専門職に対するイメージが、‘自由がない’とみている、などが確認された。

今後は、追跡的研究の中でさらに分析・検討を深め、その成果を学生指導の一助としたい。

謝 辞

本研究を進めるに当たり、学業に忙しい中こころよく調査に御協力いただきました看護学科の学生諸君に深く感謝申し上げます。また、調査を進める過程で協力していただいた一般教育科の大柳俊夫助教授に深く感謝申し上げます。

文 献

- 1) 小此木啓吾：自己愛人間。東京、筑摩書房、1993
- 2) 小野寺杜紀、波多野梗子：男子看護学生の看護職に対するイメージ、女子看護学生との比較。看護教育 36 (11) : 970-976, 1995
- 3) 白井雅美、渡部節子、坂梨薫：看護学生の看護に関するイメージの学年別による検討。日本看護科学会誌 14 (3) : 56-57, 1994
- 4) 横澤せい子、青木敏子、三浦まゆみ他：看護職に関する卒業生の意識調査。看護教育 34 (10) : 778-783, 1993
- 5) 石塚百合子、白佐俊憲、木村泰子他：看護婦イメージの研究。看護教育 23 (7) : 446-453, 1982
- 6) 白佐俊憲：学生の教職イメージに関する研究。その1-3, 北海道女子短期大学研究紀要 11 : 73-88, 1978, 12:29-44, 1979, 13 : 113-124, 1980

Self Image of Nurse, Occupational Therapists, Physical Therapists, and Medical Doctors on Becoming University Freshmen (1)

Yuriko ISHIZUKA¹, Yuuko MITO², Atsuko SUGIYAMA¹,
Kiyoko KIHARA¹, Tomoko MARUYAMA¹

Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University¹
Tokyo Metropolitan College of Allied Medical Sciences²

Abstract

We conducted a study of student nurses in order to determine their image of their own occupational status and role, and that of PTs', OTs', and MDs' upon their becoming freshmen of a 4-year-course at university. The subjects for the study were two hundreds and five student nurses of Department of Nursing, School of Health Sciences, Sapporo Medical University. The survey was carried out in April, soon after their entry to the University. Images of the intuitive impression were analyzed by semantic differential technique (SD) and evaluated by 18 scales with 7 grades each. Students wrote their individual student numbers on the (survey sheet/questionnaire) to facilitate follow up study.

The following results were obtained:

- a) The students want to become professional nurses.
- b) The perceived image of nurses is generally very good and positive.
- c) They imagine nurses to have very limited freedom.
- d) They have a better image of nurses than other medical professionals.
- e) Their image of other medical professionals is one of limited freedom.

Key words : Image for Nurse, S.D. technique, Intuitive impression